

## William Godwin の戯曲への挑戦

— 悲劇 *Antonio* より —

### William Godwin's Attempt at Writing for the Stage:

#### Tragedy of *Antonio*

Rina Suzuki

鈴木 里奈

#### 要 旨

William Godwin (1756-1836) はロマン派時代の「最も信頼できる戯曲の恋人」の一人であったと言われている<sup>1</sup>。彼は半世紀の間におよそ 2000 回も劇場に足を運び、自らも戯曲を執筆、出版した。Godwin を英国の急進的政治思想家、小説家として評価する研究が数多くある中、彼の戯曲や劇作家としての活動に関しては、これまであまり注目されることはなかった。フランス革命の影響を受け、政治的動乱期にあった 1790 年代において、*Political Justice* (1793) の出版で英国知的社会に華々しくデビューして以来、その生涯で最も活躍した時期に、Godwin が他のどの著作にも勝るとも劣らないほどの心血を注いで戯曲を執筆していたことはあまり知られていない。また彼が Drury Lane や Covent Garden を始めとする劇場や多くの劇作家、俳優たちにとって少なからず影響力のある存在であったことも注目されてこなかった。Godwin が戯曲の執筆に精力を傾けた期間は 1790 年からの 20 年足らずであるが、その時期が彼の政治思想の発展における最も重要な時期であったことを考えれば、Godwin 研究において彼の戯曲への取り組みは再評価されるべきであると思われる。Godwin が戯曲の執筆に並々ならない情熱を抱いていたこと、それが彼の社会改革思想と強く結びついていたことは彼の手記や日記、書簡に明らかである。近年、David O'Shaughnessy が Godwin 研究においてこれまで周縁的地位に置かれてきた彼の戯曲

を体系的に再評価する研究を発表した。Godwin の哲学思想や小説を論じる上で、彼の戯曲の価値が改めて見直されつつある。本稿では Godwin の戯曲への取り組みの再評価の一端として、彼の戯曲の一つを取り上げ、絶えず発展し、修正され続ける Godwin 思想の一片をその中に模索してみたい。まず Godwin の社会改革思想における戯曲と劇場の位置づけについて、当時の文化背景を交えて考察し、それから彼の思想の媒体である戯曲の考察に移りたい。

キーワード：ディセクター教育、道徳教育、会話、カタルシス

## 1. Godwin にとっての戯曲と劇場

O'Shaughnessy が指摘しているように、Godwin の戯曲と劇場へのこだわりには、彼が育ったディセクターの教育環境とその文化が深く関係している<sup>2</sup>。権力や因習の非合理性に対する徹底した叛逆と真理の力に対する信念という Godwin 哲学の土台はこの教育環境を通して形成された。ディセクター教育は牧師を目指していた Godwin の知的探究の目を真理の本質に向けさせただけでなく、その真理を普及させる手段について考える機会を彼に与えた<sup>3</sup>。この知的探究と思索は彼の生涯を通して続けられる。Max Beer は Godwin の社会思想家としてのキャリアとディセクターとの関係について以下のように述べている。

In order to understand Godwin it must always be borne in mind that he was essentially a Calvinist preacher. His materialism is inverted a Calvinist theology. . . . *His criticism is one long Nonconformist sermon*, vivacious, diffuse, and sometimes powerful, but always based on abstract reasoning. (115) (イタリック筆者)

Beer が述べるように、*Political Justice* の説教調や初期の小説において特に顕著である教訓主義的プロットにはカルヴィン派の牧師としての Godwin の姿をはっきりと見出すことができる。また Beer の指摘は、「説教」を通して真理を伝えるという牧師の目的意識が Godwin の全作品に通底していることを示している。これは彼の戯曲を

考察する上で極めて重要な視点である。Hoxton の神学校時代、Godwin は説教とパフォーマンス・演技の類似性についての論争に強い関心を抱いた。ディセンターの指導者である Joseph Priestley (1733-1804) や Robert Robinson (1735-90) の思想に影響を受け、Godwin は、「説教」と「演技」はどちらも「説得」の行為であり、聴衆の啓蒙と道徳改革の手段になり得ると考えるようになる<sup>4</sup>。

[Drama] does that, which sermons were intended to do: it forms the link between the literary class of mankind & the uninstructed, the bridge by which the latter may pass over into the domains of the former.<sup>5</sup>

この Godwin の見解は彼が戯曲に社会改革の礎である道徳教育の可能性を見出していたことを明らかにしている。彼にとって戯曲は「説教が成そうとすることをする」ものであり、劇場は理想的な演壇と思われた。

牧師職を離れた Godwin がロンドンで文筆を開始した 18 世紀末の英国では、フランスにおいてと同様に、劇場が第一マスメディアである新聞と議会に並ぶ政治的イデオロギー論争の場となっていた。Edmund Burke (1729-97) や Richard B. Sheridan (1751-1816) を始めとする当時の知識人たちはそれぞれの体制側の思惑から政治的バロメーターとしての劇場の役割に注目していた。当時の新聞記事に“Drury Lane looked more like a meeting of the House of Lords than a theatre” (4 December 1782) と記載されることもあったほどである (Parsons 250)。劇場はまた、その頃、劇場通いを最も大切な習慣としていた Godwin にとっても重要な活動拠点であった。

The metropolitan theatres formed a kind of Grand Central Station of eighteenth-century cultural and social networks, a place of meeting for individuals but also of ranks, circles and genders, where one might cross from one defining category to another. (Russell 110)

Godwin の最も親しい友人の一人である Thomas Holcroft (1745-1809) や Elizabeth Inchbald (1753-1821) はこの頃すでに劇作家としての成功を収めていた。Godwin は

彼らから戯曲に関する多くの知識と助言を得ることになる。大物政治家を含む様々な階級の人々が集う社交の場であり、政治的関心事が随時に持ち込まれる劇場は、適切に利用することができれば、望ましい規模を備えた啓蒙教育の場となると考えられた。

しかし同時に Godwin は劇場の扱いに十分な注意を払わなければならないことを強く意識していた。漸進的改革を理想とする彼は、当時活発であったロンドン通信協会を含む急進的社会組織の集会のあまりに熱狂的で扇動的な雰囲気には危機感を抱いていたからである。彼は急進派の活動拠点であるその巨大会議の状況を静観し、この時点で、“it is not, for the most part, in crowded audiences that truth is successfully investigated and the principles of science luminously conceived” という結論に達していた<sup>6</sup>。巨大集会場と同様に多くの人々 (“from the vulgar to the polite”) が集まる劇場を理想的な啓蒙教育の場 (“a mode of intellectual and moral bootstrapping for the public”) として正しく機能させるためには適切な刺激 (“the right dramatic stimulus”) が不可欠であった (*The Plays of William Godwin* xiii)。

当時の劇場の状況は非常に騒々しいものであり、フランスにおいて Rousseau がそうであったように、Holcroft や多くの劇作家も喧騒や過熱気味のムードといった劇場の環境を嘆いていた<sup>7</sup>。しかし Rousseau とは違い、Godwin も Holcroft も共に劇場の道德教育の場としての可能性を切り捨てることはなかった。Godwin は熱狂的で騒がしい劇場の悪環境は戯曲の適切な演目によって矯正されるものと信じて疑わなかった。観客に正しい刺激を与える適切な演目、それは悲劇であった。洗練された悲劇こそ、カタルシスをもたらし、人間に内在する思考能力と探究心を覚醒させるものである。Godwin はすでに小説を真理と知識の普及の手段として利用するという意識的な試みを *Caleb Williams* (1794) と *St Leon* (1799) において実践していた。特に *Caleb Williams* の序文において彼は「真理」 (“a truth highly worthy to be communicated to persons whom books of philosophy and science are never likely to reach”) を伝達する「手段」 (“the vehicle”) として「小説」という形態 (“a performance of this sort”) を選んだことを明言している (*Caleb Williams* (以下 CW とする) Preface)<sup>8</sup>。次に Godwin はその手段の発展として戯曲を取り上げたのである。

Godwin の戯曲と劇場へのこだわりは彼の思想の変化とも深く関わっている。本格的に戯曲の執筆に取りかかった 1797 年の初めに彼は *Political Justice* に次ぐ重要な著書

*The Enquirer; Reflections on Education, Manners, and Literature* を出版した。Rousseau の教育思想を越える近代的な教育観を示すものとして重要であるこのエッセイ集の中で Godwin は知識と真理の伝達における「会話」の重要性と有用性を再確認している。*The Enquirer* は個人が知的探究を通して判断力を磨き、一人一人が政治的正義に貢献できるように、人々に考える材料を与えることを意図して書かれたものであるが、この著作自体が彼の「会話の記録」から生まれたものである。

The author has always had a passion for colloquial discussion; and, in the various opportunities that have been afforded him in different scenes of life, the result seemed frequently to be fruitful both of amusement and instruction. There is a vivacity, and, if he may be permitted to say it, a richness, in the hints struck out in conversation, that are with difficulty attained in any other method. (*The Enquirer* Preface)<sup>9</sup>

「会話」は啓発の手段として有効であり、戯曲はその可能性をさらに広げるものであった。Godwin は舞台上の登場人物たちの洗練された会話が聴衆への生きた知的アプローチとなると考えたのである。「会話」は最も単純でありふれた行為であり、その日常性、流動性、快活さと豊かさを上手く活かすことができれば全体の啓蒙が可能となる。論説や小説による啓発を試みてきた Godwin は、ここでは遂行性を伴った話し言葉による啓発の効果にさらなる期待を寄せている。そして会話は、「真理」(“[a] truth”)を「その隠れ処」(“her hiding-place”)から引っ張り出すために、すべての探究者が用いることのできる容易な手段でもあった (*The Enquirer* Preface)。Godwin にとって、「会話」に「娯楽」という知的快楽性と「教化」という目的意識を加えたものが戯曲であり、それは急進的な思想家たちの集会での議論よりも実際的な影響をより広範囲の人々に与えるものと思われた。*Political Justice* が政治的正義の実現に向けて知的階級の啓蒙を最優先としていたのに対し、より進歩的な平等主義を取り入れた *The Enquirer* の教育観においては、個人的判断能力の育成の対象を知的エリート階級に限ることをやめ、社会の構成員であるすべての人々が知的探究を進めるべきであるとしている (*William Godwin and the Theatre* 98)。この思想の変化が、Godwin

に社会のあらゆる階層の人々のホームである劇場を利用した啓蒙教育の実践を促したと言える。

Godwin の戯曲への取り組みに影響を与えたもう1つの思想の変化は、*Political Justice* の初版 (1793) に見られる人間の理性に寄せる甚だしい過信が *The Enquirer* 以降において改められたことである。Godwin 思想において人間生来の資質である理性は社会改革の最も重要な鍵である。Godwin によると、個人の判断能力は理性の正しい発動によって覚醒される。判断力を身につけた人々は現状を正しく把握し、必然的に社会全体の利益と幸福を追求するようになる。*Political Justice* の初版ではこの理性の発動を阻害するものとして家庭的愛情を含む人間のあらゆる個人的感情がその価値を奪われてしまった。しかしながら戯曲への取り組みを開始したこの時期、Godwin は人間の本質としての個人の感情を見直し、社会全体の幸福を目的とする普遍的仁愛と人間の感情とは決して相容れないものではないということを認めるようになる。そもそも感情とは人間の行為の強力な動機である。中でも個人的・家庭的愛情は近い者の幸福を維持、増大させようとする動機を生み出す。そしてそれは、必然的に人類全体の幸福に貢献しようとする動機に結びつくものであると彼は考えた。これは *Political Justice* の決定版 (1798) 及び *St Leon* の序文ではっきりと示されている。この思想の修正の背景には Godwin 自身の個人的経験、すなわち Mary Wollstonecraft (1759-97) との結婚とその幸せな家庭生活があった。

When he [Godwin] wrote *Political Justice* he was a celibate student who had escaped much of the formative experience of a normal life. As a husband and a father he revised his creed, and devoted no small part of his later literary activity to the work of preaching the claims of those “private affections” which he had scouted as an elderly youth of forty. (Brailsford 159)

この一連の思想の変化の結果、Godwin は道徳改革において感情を理性と共に重要に扱うようになる。そして彼が感情の重要性を認識したことで、戯曲と劇場はその可能性をさらに広げた。Godwin にとって戯曲は “[a] ‘means of communication’ which . . . was capable of communicating truth through a process of exchange and could marry

passion with reason” (*William Godwin and the Theatre* 22) であったからである。

先に述べたように、劇場と戯曲の教育的効果に関心を寄せたのは Holcroft や Godwin だけではない。英国にも多くの先人がいたし、また 1790 年代、そもそも英国急進派が支持していた大革命の地であるフランスで演劇は闘争の武器となり、啓蒙の手段として面目を施していた。革命の様々なイメージを民衆に与えるために、革命に伴うあらゆる出来事が戯曲やオペラ作品となって上演され、旧体制の悪弊は多くの作品のテーマとなった。これらの舞台では祝祭的性格をもった壮大で大仰な演出が広く行われていた<sup>10</sup>。しかしながら、Godwin が目指した戯曲の効果はこれとは全く異なるものであった。彼はお祭り騒ぎや華美な演出を嫌い、民衆に革命の雄々しく華々しいイメージを与えて社会変革をお膳立てするような熱狂的な雰囲気を作り出すことにあくまでも抵抗した。彼が目指したのは、派手な演出や装飾の効果で観客を沸かせる舞台ではなく、洗練された「会話」を重視した、哲学的雰囲気を持つ静観的な舞台であった。役者たちによる美德をめぐる会話の進行から、観客が自分自身で道徳の行方を追い、真理を見つけ出すことが Godwin の狙いである。つまり、戯曲は知的探究の材料を提供する *The Enquirer* のもう 1 つの形態であった。Godwin は観客を革命や社会改革運動の賛同者とするのではなく、真理の探究者にしようとしたのである。

## 2. Godwin と悲劇 *Antonio*

Godwin には 4 作の戯曲があり、これらすべてが歴史的題材を扱った悲劇である<sup>11</sup>。Stephen Bann が指摘しているように 18 世紀末の英国文学においては「歴史もの」が隆盛期にあり、ロマン派文学の必須要素の 1 つとなった。歴史に対する人々の意識が高まり、それは “[the] paradigmatic form of knowledge to which all others aspired” (4) であった。これに加えて Godwin は悲劇をすべての文学形式の中で最も「道徳的感性に卓越した」ものであると位置づけていた。したがって彼の戯曲の方向性は始めから定められていた。Holcroft や Inchbald は喜劇も書いたが、Godwin は悲劇のみに専念する。しかし彼は同時に洗練された悲劇を書くことの難解さを十分に理解していた。彼の ‘Note on Tragedy’ に興味深い記述がある。

Tragedy is perhaps the most difficult of all the classes of human composition. It is

comparatively easy to write a novel or a tale. . . . This [Tragedy] is written under laws the most merciless & inhuman. Words, words that can be spoken by the personages of the story, are all I have to deal with. No looks, no gestures, no inflexions of the voice, no quailings & flutterings of the soul, are within my reach. . . . I am the author of just what I can represent as falling from the lips of my personage, & inclose within the measure of a verse, & no more. I am like an architect furnished with a brick-kiln only for his material.<sup>12</sup>

こうした認識にも拘わらず、Godwin は優れた悲劇を書くことは彼の文学的名声には不可欠であるとも考えていた。それはまた、彼の社会改革思想家としてのキャリアにも極めて重要なことであった。Godwin の悲劇すべてに *Political Justice* の政治哲学と *The Enquirer* の教育観が取り入れられているが、ここではその中で最も知られており、実際に上演された戯曲 *Antonio; or, The Soldier's Return* (1800) を取り上げたい。

Godwin がこの戯曲を執筆したのは、彼が、*Political Justice* によって不正と貧困を生み出す社会制度の体系的批判者として名声を博し、*Caleb Williams* の出版によって小説家の地位を確立してから数年後の、まさに「忘却の流砂」に埋没し始めていた頃であった<sup>13</sup>。したがって Godwin が劇作家としてこの戯曲の成功に強い期待を寄せていたことは容易に想像できる。*Antonio* の執筆を開始する直前に書かれた Godwin の手記は彼の意気込みを伝えている。

Magnus ab integro seclorum nascitur ordo.

I have been a metaphysician, a political theorist — I have been a writer of fictitious histories & adventures — Enough; let these be dismissed — be now another man — turn your whole thoughts to the buskin & the scene — be that the labour of your being — hoc cura, hoc roga, & omnis in hoc sis!<sup>14</sup>

C. Kegan Paul によると、*Antonio* は Godwin がそれまでのどの作品よりも苦心して書き上げたものであった (II. 38)。Godwin はこれを *The Enquirer* を書き上げてから数カ月後に書き始め、緻密な修正を繰り返して 1800 年の末に完成させたが、この期間



は彼が生涯で最も頻繁に劇場を訪れていた時期と重なる。また、*Antonio* の執筆中に妻 Wollstonecraft が産後の病のために亡くなり、Godwin は一度この戯曲を中断して小説 *St Leon* を書き上げているため、この2つの作品の相関性は非常に強い。Godwin 自身にとって *Antonio* は彼の「全ての作品の中で最も完成されたもの」であった (Paul II. 37)。Holcroft や Coleridge を含む彼の友人たちはこの戯曲に対して極めて消極的であり、また否定的であったが、Godwin の強い意志のもと、*Antonio* は1800年12月に Drury Lane において上演された<sup>15</sup>。プロローグを Charlotte Smith、エピローグを Charles Lamb が書いている。

Godwin の *Antonio* における試みは *The Enquirer* においてと同様に「知的探究の材料の提供」と「個人の判断能力の育成」にある。*The Enquirer* での目的意識はそのまま *Antonio* にも受け継がれている。

I would willingly therefore communicate knowledge, without infringing, or with as little as possible violence to, the volition and individual judgment of the person to be instructed. (*The Enquirer* 114)

観客の思考を妨げずに劇を進行することがこの戯曲の命題である。したがって派手なアクションを入れずに、内省的な登場人物たちの「会話」の中に彼らの心の作用と動機を探るように観客を仕向けなければならない。Godwin の啓蒙思想において、まず研究すべきは人の心であり、「会話」も含め、あらゆる道徳教育の手段はすべて人間の心の作用と動機の探究を目的とするものである。ここからは、観客の知的探究の材料として Godwin が提示する悲劇の根源が何であるか、またその悲劇を回避することのできない人間の心の作用を Godwin がどのように描いているかについて考察していくことにする。

### 3. *Antonio* における Godwin 思想 — 契約について —

これは15世紀のスペインを舞台にした、血族の名誉への執心のために墮落していく誇り高い帰還兵 Antonio de Almanza の物語である。小説においてと同様に、この戯曲でも歴史的題材を利用して現状の政治的、社会的イデオロギーが孕む諸問題を提

起するという Godwin の手法が用いられている。戦場から戻った Antonio は妹 Helena が誉れ高い騎士 Gusman と結婚していることを知って激昂する。亡き父が死床で Helena の夫として選んだのは Antonio が最も尊敬する友人であり、今も戦場に残っている勇敢な戦士 Rodrigo であったからである。Antonio にとって生前の父の最後の決定は Almanza 一族の名誉において絶対に遂行されなければならない。しかし Helena と Gusman の結婚はスペイン王 Pedro の承認を得たものであった。

まず悲劇の発端が、Godwin がその政治哲学において何度も取り上げてきたテーマである「契約」にあることがわかる。Godwin にとって人間の自由な思考と判断に古びた鎖をかけるものが「契約」である。Antonio は父の定めた Rodrigo との結婚こそが正当であり、Gusman との結婚は「下劣な誘惑」と「強奪」(IV. ii. 274-5) の所産であると主張する<sup>16</sup>。

This was a marriage: thou wert Rodrigo's wife.

Where ever was a Contract, seald with such

Solemnity, in every circumstance.

So venerable, so binding? — Adultrous! — (II. i. 197-200)

ここでの Antonio の“Contract”という言葉は、個人の間契約である「婚約」を意味すると同時に、政治思想における国家の母体である政府と個人との「社会契約」という響きを帯びている。政府のあらゆる法則が個人の“Acquiescence”と“a tacit consent”(*Political Justice* (以下 *PJ* とする) 213-6) を必須前提としているように、Antonio もこの婚約に対する Helena の黙従を要求する<sup>17</sup>。そしてこの契約に背いた Helena を“Adultrous!”と糾弾する。

Godwin は *Political Justice* において、社会の「契約」(social contracts, promises, oaths and declarations) が個人に与える影響とその有害について分析した。そして約束・契約としての発話は道徳や健全な社会のための基盤とはなり得ないとした。“... promises and compacts are in no sense the foundation of morality” (*PJ* 217) というのが彼の結論である。契約とはあくまで一時的な表面上の取り決めであり、その長期化はその後の個人の“right motives and a pure intention” (219) の発動を妨げる。

過去に交わされた「仮定」に基づく文言が未来における人の思考と行為に制約を課し、自然に生じる動機や意図に影響を与えることを Godwin は強く批判する。人間は知的・道徳的性質において常に成長の途上にあり、知識と経験を獲得しながら絶えず進歩するものである (77)。契約や約束が、たとえ過去の一時期に有効であり、最良であったとしても、未来における人の思考や行為に対して拘束力を維持し続けることはその進歩の妨げ以外の何物でもなく、結果的に社会の進歩の妨げにつながる。

「契約」とは「政府」と同じように“an evil”であり、その最良の場合においても“a necessary evil” (220) でしかない。Godwin は強烈な比喩を用いて、「契約」を「四肢の切断」と同類のものであると言う。たとえ壊疽を止めるためのやむを得ない処置であったとしても、切断に伴う痛みは「悪」であり、また、その人の残りの人生の喜びと社会に貢献する能力を縮小させるものであることから間違いなく「悪」である。

The case of promises is considerably similar to this. So far as they have any effect, they depose us, as to the particular to which they relate, from the use of our own understanding; they call off our attention from the direct tendencies of our conduct, and fix it upon a merely local and precarious consideration. There may be cases in which they are necessary and ought to be employed: but we should never suffer ourselves by their temporary utility to be induced to forget their intrinsic nature, and the demerits which adhere to them independently of any peculiar concurrence of circumstances. (222)

切断と同じように契約とは人間の精神の健全な働きを奪ってしまう。このような言葉のやり取りは「うわべだけの言葉の活用」であり、Godwin にとっては、真理も道徳性もない、現実の経験と調和しない表現に過ぎない (Esterhammer 295)。 *Political Justice* で Godwin は社会契約の本質について、その無意味さを強調して論じたが、 *Antonio* においては、人間の精神の成長と自由とを抑制する社会契約の実際的な機能を中世の一家族の悲劇の要因として展開した (Smith and Smith 116)。Lamb が歌っているように、“In that romantic unenlightened time / A breach of promise was a sort

of crime” (Epilogue 5-6) という 15 世紀スペインの時代背景そのものが悲劇の母体である。他方で Lamb は戯曲の悲劇性から逸れた調子で人間と契約の関係について歌っている。

Man is a promise-breaker from the womb,  
And goes a promise-breaker to the Tomb. (Epilogue 14-5)

Helena の苦悩の根源となる父親との約束は、政府が個人に課す服従の契約と同じものである。それに盲目的に従うことで個人の道徳的、感情的成長は阻害されてしまう。Antonio が繰り返す「契約」の文句、「うわべだけの言葉の活用」に対し、Helena は夫 Gusman に対する “The words of love” (II. i. 207) で答える。Helena の誠実な愛の言葉は、それは亡き父と Antonio に対して向けられたものでもあるが、Gusman との幸福な生活において培われたものであり、彼女の健全な精神を表している。Helena は父親の言葉の尊さを認めているが、それを Antonio のように “[a] blest religion” (IV. ii. 165) の域まで高めることはしない。ただ “The binding force of contracts” (III. i. 395) を強調する Antonio と誠実な Helena のやり取りは、“the obligation of sincerity. . . is not founded in promises” (PJ 229) という Godwin の思想の投影である。

また Helena の言葉には結婚がもたらす家庭的幸福に対する Godwin の見解の変化も投影されている。Godwin は、あらゆる社会制度の批判者として、結婚の契約を “a system of fraud”、“the worst of monopolies” (PJ 762) であるとする。一時の判断に永遠性を求めることは不可能であり、その判断を無理に維持することは互いの偏見と誤りを増大させるだけである。また結婚制度は “despotic and artificial means” によって伴侶を所有しようとする行為であり、“the most odious selfishness” (762) を生み出す。しかしながら、Wollstonecraft との結婚によって経験した幸せな家庭生活 (“the more delicious and heart-felt pleasures of domestic life”)<sup>18</sup> を通して彼は、個人の知的、社会的独立を阻害する現行の結婚制度の害悪を指摘しながらも、その生活の中で自然に生じる家庭的、個人的愛情の価値は見直すべきであると認識する。そして道徳改革におけるそれらの効用を認めるようになる。Antonio と同時期に執筆されていた St

*Leon* では家庭的愛情への賛美が見られる<sup>19</sup>。H. N. Brailsford がまとめているように、Godwin の初期の思想においては、社会の最大幸福 (“the general good”) への貢献を真の正義とする普遍的仁愛 (“universal benevolence”) という極端な愛他精神のために「家庭」が完全に解体されていたが、その後の思想の修正の中でこれは立派に再結合されるのである (161)。Gusman への愛と彼との結婚の神聖さを訴える Helena の言葉にはそれが読み取れる。

I am a wife; a sacred title  
 Fraught with all mysteries that adorn our nature:  
 Love, sympathy, endearments mutual,  
 Community of thoughts, of wishes, sentiments,  
 Have drawn each day the band closer and yet  
 More close — . . . (IV. ii. 136-141)

真の英知は個人的愛情を奨励するものであり、ここで Godwin はこれを育む結婚生活を否定していない。彼が否定するのは個人に永続的な共生を要求する社会契約としての結婚制度であり、現在の人間の感情に対して無情である過去の取り決めに絶対的な拘束力を付与する慣習である。過去の「契約」が悲劇の発端であり、それを加速させるのが次に取り上げる Antonio の一族の名誉に対する執着である。

#### 4. Antonio における Godwin 思想 — 名誉について —

「名誉」に対する執着心がかもたらす悲劇は Godwin の小説において繰り返し取り上げられるテーマの1つである。Antonio、すなわち「騎士道の美徳の化身」(St Clair 231) を先行する登場人物として最初に思い起こされるのは *Caleb Williams* の Ferdinando Falkland であろう。彼は Godwin の全小説の中で最も有名で最も気高い “the fool of honour and fame” (CW 102) である<sup>20</sup>。知性と美徳を身につけた紳士である Falkland はしかし、若い頃より “the poison of chivalry” (CW 326) に溺れ、自らの名誉を守ることを全てに優先させた結果、破滅への道を辿る。

A sense of honor is desirable and necessary, but to be obsessed by it and defend it at any cost brings to his destruction one character after another in the [Godwin's] novels. (Powers 75)

Falkland の次に登場する St Leon もまた同じ系譜に属する人物である。彼は一族の名誉と名声に執着するあまり禁断の知識 (“the philosopher’s stone and the elixir of life”) を手にしてしまう。“There is nothing that I know worth living for but honour” (*St Leon* 10) という意識は Falkland、St Leon、そして Antonio に共通している。Antonio もまた、騎士道の教えと名誉の誤った解釈のために破滅へと導かれる。St Leon が「第2の Falkland」<sup>21</sup>であるなら、まだまだ無名ではあるが、Antonio は「第3の Falkland」と言えるだろう。

Honour! —

What is the world to me if robb’d of honour?

No kindred, no affection can survive. (II. i. 258-60)

Antonio の一族の名誉への固執は彼の “[my] infant creed” (II. i. 264) から生じている。彼にとって自身の行為を正当化させるものは彼の精神に根付く騎士道の美徳である。王が絶対的権力を持つ中世スペインの名誉ある一族の長子として、彼はもとより「名誉に仕えるもの」、*“slave of honour’s laws”* (Prologue 28) となるべく育てられた。Godwin の社会改革思想の中枢には「人間は環境の産物である」という見解があり、Falkland や St Leon と同様に Antonio もまた貴族教育の弊害の犠牲者とみなすことができる。

... the actions and dispositions of mankind are the offspring of circumstances and events, and not of any original determination that they bring into the world. (*Pf* 97)

過度に名誉を重んじる貴族教育の弊害が Antonio の気質を形成し、彼の行為の動機となっている以上、その責めを負うのは彼ではない。

Godwin は Falkland の道徳的墮落によって旧体制の産物である騎士道の誤った理想概念を批判した。ここで Godwin の騎士道と名誉に関する見解には Burke の思想が深く関わっていることを認識しておかなければならない。Burke は有名な *Reflections on the Revolution in France* (1790) においてフランス革命での市民の野蛮と残虐を批判し、王制、貴族制という旧体制を擁護した。その際に彼が用いた“the age of chivalry”と“chastity of honour” (*Reflections* 73) の輝かしいイメージに対して、Godwin は騎士道の名誉の法則が人の道徳観念にもたらす歪んだグロテスクな作用を Falkland の破滅に描き込んだ。Antonio にとっての唯一の指針“the living Law within his Bosom” (I. i. 66) であり、彼の精神に働きかけ、その行為の強力な動機となっているのも同じ名誉の法則である。

For that he'd risk all consequences, and  
For that would die. (I. i. 67-8)

Godwin は、名誉の法則と騎士道精神の生みの親である「貴族制」は「君主制」と同類のものであると主張する。つまりどちらも虚偽と無知とに支えられており、その盤石が脅かされるやいなや「暴君」を生み出すのである。

Aristocracy, like monarchy, is founded in falsehood, the offspring of art foreign to the real nature of things, and must therefore, like monarchy, be supported by artifice and false pretences. (*Pf* 479)

Falkland が美德の紳士から殺人者へと変わったように、Antonio も一族の名誉を脅かされたとき、即座に英雄から暴君“Tyrants”、“the monarch of his fellow / Hard-hearted, rigid and inexorable” (II. i. 271, 273-4) へと変わる。

Gusman のもとから Helena を誘拐し、修道院に閉じ込めようとする Antonio の行為はもはや“warrior's task”でもなければ“hero's calling” (IV. ii. 17) でもない。しかし Antonio にとってはこれが一族の名誉を守るための長子の義務であるという。ここでの Helena の“Why dost thou mock me with thy reasonings? / . . . Think not, thou /

Canst cheat my Soul!” (IV. ii. 86-8) という言葉は、旧体制の多くの弊害に目を瞑ってそれを擁護しようとする Burke に対する Godwin の “Why deceive me? . . . Shall I most improve while I am governed by false reasons, by imposture and artifice, which, were I a little wiser, I should know were of no value in whatever cause they may be employed?” (1793 *PJ* II. 508-9) という呼びかけに通じるものがある。Godwin が Burke を “imposture” と見做したように、Helena は Antonio を “sophist, dissertating pedant” (IV. ii. 124) と呼ぶ。

重要な点として、*Antonio* において Godwin は、名誉、騎士道、貴族制の悪弊を社会の進歩・発展を妨げるものとしてというよりも、人間の本質から生まれる自然な感情、“domestic charities” (Prologue 20) を損なうものとして断罪している。名誉の法則の下での *Antonio* の行為は “[attempt] to chain the sallies of the heart”, “[attempt] to change the warm realities / Of this fair globe, into a Scenic show / Of empty motions, figures without souls” (IV. ii. 125-8) であるとして、Helena はそれを軽蔑する。「この美しい地上における温かい現実」こそ Helena の抱く家庭のイメージであり、それはまた、彼女を先行する女性である St Leon の妻 Marguerite de Damville が熱望したものであった。

悲劇は激怒した *Antonio* が Helena を刺殺し、悔恨に嘆く場面で最終局面を迎える。自らの正義と美徳の行為を正当化することができず、悔悟の念にかられるという Godwin 小説の主人公に *Antonio* もまた加わることになる。*Antonio* の悔悟は当然のことながら理性に依らない暴力の結末であるが、彼の一連の行為には Godwin の権力批判が集約されている。*Antonio* の突発的な残虐行為の引き金となったのは *Gusman* や Helena ではなくスペイン王 *Pedro* の言葉である。15 世紀スペインの法律のもとで王は絶対権力 “the fountain of authority” (V. i. 260) を握っている。そもそも Godwin 思想において王とは、不自然に集中した権力を背負い、追従と虚偽に囲まれて生きる、人間の中で最も欺かれた存在 “the most unfortunate and the most misled of all human beings” (*PJ* 424) である<sup>22</sup>。しかしこの国家であらゆる契約に完全な正当性を付与することができるのは *Pedro* だけである。一度は *Antonio* に対し、*Gusman* と Helena の結婚を無効にすると約束しておきながら、それを反故にし、翻って 2 人の結婚の承認を宣言した *Pedro* の変節が最終的に *Antonio* を狂気に追い込んだのである。絶対権



力が介入する契約はそれ自体が暴政の産物となる。一族と国家の2人の暴君によって Helena は憐れな犠牲者となる。

##### 5. Antonio における Godwin 思想 — 普遍的仁愛と家庭的情愛について —

功利主義的な「普遍的仁愛」と個人的な「家庭的情愛」とが相容れないものではないという思想を最後の Helena の行為に読み取ることができる。Antonio のさらなる墮落と Gusman との決闘を阻止するために Helena は修道院に留まることを決意する。彼女のこの自己犠牲的行為は「利己心」と「普遍的仁愛」の間の葛藤が生み出したものである。

Oh, let me reconcile your strife! Willingly

I'd spill my blood to end this hated contest. — (V. i. 336-7)

これはまた、権力の介入によって成立する「契約」としての結婚との決別を意味する。Helena は自らの決断が“more transcendent good” (V. i. 348) につながることを願う。彼女の選択は不完全で力のないものであったが、それは Gusman への愛と皆の幸福とを結びつけようとする試みであった。Godwin が亡き妻 Wollstonecraft の美德、精神、家庭的な感性を投影して創り出した St Leon の妻 Marguerite に比べると Helena はあまりに若く未熟ではあるが、2人は共に家庭的・個人的愛情の美德を示す存在であり、この時期の Godwin の作品に特有の女性である。

「聴衆の感情を引き裂く」ことでカタルシスをもたらし、人々の精神の啓蒙と個人の判断力の育成を図ることがこの戯曲の目的である<sup>23</sup>。そのため Antonio の突発的な狂気によって Helena の意志が砕かれるのを人々は見ると同時に、観客は悲劇的結末とそれに続く Antonio の悔悟から真の美德について思考しなければならない。この悲劇の特質は *Caleb Williams* や *St Leon* と違い、いわゆる「悪漢」が存在しないことである。*Caleb Williams* には Barnabas Tyrrel という支配階級と貴族教育のあらゆる悪弊が投影された残酷な暴君がいたし、*St Leon* にも社会に復讐することを目的として生きる人間嫌いの Bethlem Gabor という「Godwin の最も卓越したゴシック的悪漢の一人」(Rajan and Wright 73) に数えられる人物がいた。同じ時期に書かれた *St Leon* にこれ

ほどの悪漢が描かれているにも拘わらず、*Antonio* にはその存在がない。これが Godwin の意図的な試みであったことは当初彼が書いていたプロローグの草稿に示されている。

In these times of war & political contest, our humble author aspires to call your attention to a domestic tale — no political jars, no clashing dogmas of angry party, will find a place in his scenes — he has no villain. . . .<sup>24</sup>

誤った騎士道の美徳に導かれる Antonio と Gusman、そして絶大な権力を掌握する Pedro も決して悪漢ではなく、基本的には善良である。それにも拘わらず悲劇が進行することについて人々はただ受け身の観客でいるわけにはいかず、積極的な思考を開始しなければならなくなる (*William Godwin and the Theatre* 101)。

人間の心の作用に常に関心を寄せていた Godwin はその小説の中でいつも利己心と普遍的仁愛の間に生じる葛藤をテーマとして扱ってきた。“If self-interest and benevolence pull him in different directions, how is he to decide between them?” (Monro 40) という問題に彼の小説の主人公たちはいつも直面する。人間は私利を追求するものであり、それが極めて自然であるということは徹底した功利主義者である Godwin であっても否定することはできない。彼が描いたのは、全体の幸福を求める普遍的仁愛に対して私利をはるかに優位に、また支配的な地位に置くことを自分自身に許した人々が招く悲劇であった。Falkland、St Leon、そして Antonio も、その圧倒的な名誉欲のために他者への純粋な思いやりや共感が潰されてしまった。特権階級制度や貴族教育は私利と普遍的仁愛の両方を生かすことを決して教えることはなく、常に私利を最優先させることを許す傾向がある。究極の悪漢は一貫して、利己心と普遍的仁愛のバランスを保つ理性の発動を妨げる権力構造であり、貴族教育なのである。未熟な Helena は個人的愛情と普遍的仁愛の両者を有機的に結びつけることはできなかったが、決して一方を切り捨てることはなかった。

## 6. まとめ — *Antonio* の評価 —

*Antonio* には Godwin 哲学の土台とその発展とを読み取ることができる。特にその

執筆期間が Godwin にとって大きな思想の転換期にあたるため、この戯曲は Godwin 思想の研究において小説 *St Leon*、論説集 *The Enquirer* と並んで重要なものと位置づけることができる。Godwin は *The Enquirer* の序文で以下のように述べている。

The intellectual eye of man, perhaps, is formed rather for the inspection of minute and near, than of immense and distant objects. (77)

知識と真理の普及についての考えを発展させていく中で、Godwin は「人間の知的な目」は「些細で身近なもの」を捉えるようにできているという結論を得た。そのため、*St Leon* と *Antonio* からあからさまな政治色を取り除き、より個人的で家庭的な出来事 (a domestic tale) をプロットの中心に据えている。より身近で効果的な知的啓蒙の手段は「会話」であるため、この戯曲では小さな共同体に属する内省的な個人の心的葛藤を彼らの会話を通して表現することに焦点を置いている。

しかしながら、悲劇 *Antonio* は Godwin の当初の自信に反して大失敗に終わった。Godwin が取り入れた道徳改革の手法が戯曲には適さなかったと考えざるを得ない。当時の批評家たちがこぞって批判したのは、Godwin が意図的に取り除いた「悪漢」と「暴力」という戯曲の要素の欠如であり、また登場人物の間で交わされる冗長な会話であった。Coleridge が Godwin に指摘していたように、やはり人々が期待するのは存在感のある悪漢、Coleridge の言うところの “a proper Rogue, in the cutting of whose throat the Audience may take an unmingled pleasure” であり、その不在は観客の大きな不満の原因となった<sup>25</sup>。さらに、洗練された会話だけに焦点を当てたかっ Godwin は人々の思考や知的探究の妨げになると考え、舞台から装飾や劇的な場面を一切排除した。これについて Lamb は Godwin への手紙の中で、舞台の視覚的装飾の必要性を伝え、同時に劇全体のアクションの欠如を指摘していた。

To relieve the former part of the Play, could not some sensible images, some work for the Eye, be introduced? . . . At all events, with the present want of action, the Play must not extend above four Acts, unless it is quite new modell'd. (Paul II. 39)

劇的効果を最も望むことのできた場面は、修道院に閉じ込めるために妹をさらった Antonio と Gusman が互いへの怒りを露わにして対峙する 4 幕の終わりである。ここで観客は 2 人の激しい決闘を期待したが、それは決闘の悪徳と騎士の美德についての Antonio の哲学的なスピーチに取って代わられる。2 人の激しい決闘の場面が入れば、ここまでの舞台効果の欠如の取りなしになったであろう。しかし、いわば「お約束の決闘」に対する当然の期待は Godwin 的な「哲学的静寂」によって裏切られる。

They [The audience] could not applaud, for disappointment; they would not condemn, for morality's sake. The interest stood stone still. . . .<sup>26</sup>

Lamb によると、登場人物たちのこの上なく素晴らしい道徳的感性のために、あまり洗練されていない観客の期待は裏切られ、人々は肩透かしをくう形となったのである。ほとんど装飾のない裸の舞台上で、これといったアクションもなく続けられる対話を *Morning Post* は「長たらしい内輪話」（15 December 1800）と批判した。

Helena の死の場面は Godwin が期待したようなカタルシスをもたらすことはなく、Antonio の悔悟もその効果を生み出さなかった。Lamb は劇的な表現で回想している。

The whole house rose up in clamorous indignation demanding justice. The feeling rose far above hisses. I believe at that instant, if they could have got him, they would have torn the unfortunate author to pieces.<sup>27</sup>

*Antonio* は結局一晚限りの上演となる<sup>28</sup>。当時、戯曲の再演やその上演期間は舞台初日の晩の観客の反応によって決定されていた (*William Godwin and the Theatre* 46)。その結果、*Antonio* は *Political Justice* の出版以来のすべての著作の中で Godwin の最初の完全な失敗となった (Locke 190)。しかし Godwin はこの失敗をあくまで興行的な評価として受け止めていたようである。というのは、劇が初日限りの公演で終わることとなり、各誌も当然のように痛烈な批評を掲載したが、Godwin 自身はさっそく戯曲に修正をかけ、それを出版したからである。

... if I had thought it [*Antonio*] wholly unworthy the reader's attention, I should have committed it, not to the press, but to the flames.<sup>29</sup>

Godwin は決して当時の舞台や戯曲の流行を知らなかったわけではない。実際は誰よりも劇場に通い、舞台の進行と観客の反応をつぶさに観察していた。*Bluebeard* や *Pizarro* などの当時成功を収めていた舞台を繰り返し観劇し、舞台装飾や劇的アクションがどれほど観客を喜ばせるものであるかも知っていたはずである。しかし彼は戯曲の啓蒙効果を優先し、戯曲そのものを知的探究の素材を提供する媒体に仕立てた。このことは *Antonio* がただ借金返済のための Godwin の必死の努力の所産であると考えられる批評家たちの見解への反駁となり得る。確かに、この頃の Godwin の生活の困窮ぶりや戯曲の報酬の高さを考えると、彼が *Antonio* の成功に財政的な期待を寄せていたことは想像できる。しかし、それだけを Godwin が *Antonio* にかけて長い時間と熱意の解釈とすることはできないだろう。Godwin の戯曲の執筆に対し、Lamb や Coleridge も含め、多くの批評家が "... why had he [Godwin] abandoned the novel, where he had proved so spectacular, and tried his hand so disastrously on the stage?" (Locke 190) という疑問を投げかけてきたが、この答えを押し量る際に、報酬と名声への期待だけではなく、Godwin の社会改革思想家としての試みの可能性にも焦点を当てるべきである。

彼の戯曲への挑戦は *Antonio* の失敗では終わらなかった。Godwin はさらに2つの戯曲を執筆し、その意欲で友人たちを驚かせた。最後の戯曲 *Faulkener* (1807) をもって彼の「劇場を支配しようとする試み」(Brailsford 173) は終わることになるが、戯曲執筆にかけての精励の影響はその後の小説に投影されることとなる。Godwin の戯曲の評価は極めて低いが、彼が常に文学を社会改革の手段とみなしていたことを考えれば、Godwin 研究において小説や政治論評と同等の価値があるのではないかと思われる。

## Notes

- 1 詩人であり、英国悲劇女優 Sarah Siddons (1755-1831) の伝記作家であった Thomas Campbell (1777-1844) がその著書の中で Godwin についてそのように

- 評している。彼は続けて“I shall never forget the pleasure I received from the vivid remarks of this patriarch of our living literature. The freshness of his recollections, and his hearty interest in the history of the stage, are worthy of his gifted genius.”と述べている。Thomas Campbell, *Life of Mrs Siddons*, 2vols (London: Effingham Wilson, 1834), vol. 1, pp. 189–90.
- 2 Godwin の戯曲への関心とディセンター教育の相関性については David O’Shaughnessy, *The Plays of William Godwin*, Introduction を参照。
  - 3 Godwin の家系は祖父以来、非国教派の牧師であり、彼は極めて厳格なカルヴィン教義の中で育つ。Godwin 自身も牧師になることを目指し、17 歳で Hoxton の神学校に進学した。卒業後の 5 年間、牧師として各地の非国教派の集会で説教を行っている。
  - 4 O’Shaughnessy によると、Hoxton の神学校でのディセンター教育は、説教における「雄弁」(oratory)、「遂行性」(performativity)、「演劇性」(theatricality) の重要性を Godwin に認識させた。この当時、芝居と説教の類似性に関する論争が盛んであり、Joseph Priestley がその一端を担っていた。*The Plays of William Godwin*, x.
  - 5 Oxford, Bodleian Library. [Abinger] Dep. b. 229/9. *The Plays of William Godwin*, x.
  - 6 William Godwin, *Considerations on Lord Grenville’s and Mr. Pitt’s Bills: Concerning Treasonable and Seditious Practices, and Unlawful Assemblies* (1795), p. 17.
  - 7 自分自身が劇作家でもあった Rousseau はしかし、劇場を墮落した社交の場であるとみなし、住民がすでに不道徳に陥っている Paris のような都市には許されるものであると考えていた。Godwin の思想と戯曲における Rousseau の影響に関しては *William Godwin and the Theatre*, pp. 17–30 を参照。
  - 8 本稿中の *Caleb Williams* の引用はすべて David McCracken, ed. *Caleb Williams* (London: Oxford UP, 1970) に拠る。
  - 9 本稿中の *The Enquirer* の引用はすべて *Political and Philosophical Writings of William Godwin*, gen. ed. Mark Philp, 7vols (London: William Pickering, 1993), vol. 5: *Educational and Literary Writings*, ed. Pamela Clemit に拠る。
  - 10 フランスにおける革命期の演劇についてはベアトリス・ディディエ。小西嘉幸訳

- 『フランス革命の文学』 pp. 84-90 を参照。
- 11 *St Dunstan* (1790)、*Antonio; or, The Soldier's Return* (1800)、*Abbas, King of Persia* (1801)、そして *Faulkener, a Tragedy* (1807) である。実際に上演されたものは *Antonio* と *Faulkener* の 2 作のみである。
  - 12 'Note on Tragedy,' Ab. MSS., Dep. b. 229/4. *The Plays of William Godwin*, Appendices.
  - 13 William Hazlitt, *The Spirit of the Age, or Contemporary Portraits* (1825), p. 30.
  - 14 MS Abinger, c. 37, ff. 48-56. *William Godwin and the Theatre*, p. 93. 最初のラテン語は Virgil の Eclogue IV からの引用であり、“The great order of the ages is born afresh” という新しい黄金時代の夜明けについての詩句である。最後は Horace の Epistle I からの引用句であり、“care for this, demand for this, and be everything in this” という意味を表す。
  - 15 戯曲の舞台化を前に Coleridge は Godwin に再三の忠告を与えている。“The success of a Tragedy in the present size of the Theatres, the success of a TRAGEDY is in my humble opinion rather improbable than probable —. What Tragedy has succeeded for the last 15 years?” Coleridge’s letter to Godwin (6 December 1800). *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. Leslie Griggs, 6 vols (Oxford: Clarendon P, 1956-71), vol. 1, p. 653. また Holcroft も *Antonio* のプロット構成、人物造形に対して否定的であり、“There is a defect in the tale which no power of genius can overcome, and which I am surprised that genius should not at once have perceived.” と記している。William St Clair, *The Godwins and the Shelleys*, p. 231.
  - 16 本稿中の *Antonio* の引用はすべて David O’Shaughnessy, ed. *The Plays of William Godwin* (London: Pickering & Chatto, 2010) に拠る。
  - 17 本稿中の *Political Justice* の引用はすべて Isaac Kramnick, ed. *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Modern Morals and Happiness* (London: Penguin, 1985) に拠る。
  - 18 Pamela Clemit and Gina Luria Walker, eds. *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman* (Ontario: Broadview, 2001), p. 199.

- 19 *St Leon* の序文で Godwin は *Political Justice* 初版において人間の感情をあまりに過小評価したことの誤りを認め、次のように述べている。“I apprehend domestic and private affections inseparable from the nature of man, and from what may be styled the culture of the heart, and am fully persuaded that they are not incompatible with a profound and active sense of justice in the mind of him that cherishes them. True wisdom will recommend to us individual attachments; for with them our minds are more thoroughly maintained in activity and life than they can be under the privation of them; and it is better that man should be a living being, than a stock or a stone.” 本稿中の *St Leon* の引用はすべて Devendra P. Varma, ed. *St. Leon: A Tale of the Sixteenth Century* (New York: Arno P, 1972) に拠る。
- 20 Falkland is “a man whom in the pursuit of reputation nothing could divert; who would have purchased the character of a true, gallant and undaunted hero at the expence of worlds, and who thought every calamity nominal but a stain upon his honour”(CW 102-3)
- 21 Holcroft’s letter to Godwin (19 July 1799). C. Kegan Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries*, vol. 1, p. 343.
- 22 この表現は François de Salignac de La Mothe-Fénelon (1651-1715) の *Les Aventures de Télémaque* (1699), Liv. XIII からの引用である。Godwin は王の存在について定義するためにこの表現を用いた。彼はまた “In reality, nothing can be more iniquitous and cruel than to impose upon a man the unnatural office of a king.” (PJ 427) と結論づけている。
- 23 “I must tear the heart-strings of the audience, or I do nothing.” MS Abinger, c. 33, ff. 13-30. *William Godwin and the Theatre*, p. 103.
- 24 ‘Prologue to *Antonio*,’ *The Plays of William Godwin*, Appendices.
- 25 Coleridge’s letter to Godwin (20 December 1800). *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, vol. 1, p. 657.
- 26 Charles Lamb, “The Old Actors” (*London Magazine*, 1 April 1822).
- 27 Ibid.



- 28 Antonio を演じた John P. Kemble は Godwin に宛てた手紙の中で、この舞台の結末をある程度は予測していた。“I never ventured to say that Antonio would be acted only one Night — very possibly it may be acted five or six or seven nights, but that kind of success would at once be a great loss to the theatre, and I daresay a great disappointment to your expectations.” (Paul II. 42)
- 29 Advertisement to *Antonio*. *William Godwin and the Theatre*, p. 106.

### Works Cited

- Bann, Stephen. *Romanticism and the Rise of History*. New York: Twayne, 1995.
- Beer, Max. *The History of British Socialism*. 2vols. London : G. Bell & Sons, 1921.
- Brailsford, H. N., *Shelley, Godwin and their Circle*. London: Oxford UP, 1942.
- Campbell, Thomas. *Life of Mrs Siddons*. 2vols. London: Effingham Wilson, 1834.
- Clemit, Pamela. *The Godwinian Novel: The Rational Fictions of Godwin, Brockden Brown, Mary Shelley*. Oxford: Clarendon P, 1993.
- Edmund Burke, *Reflections on the French Revolution* (1790). Introduction. A. J. Grieve. London: Dent, 1955.
- Esterhammer, Angela. *The Romantic Performative: Language and Action in British and German Romanticism*. Stanford: Stanford UP, 2000.
- Godwin, William. *Caleb Williams* (1794). Ed. David McCracken. London: Oxford UP, 1970.
- . *An Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on General Virtue and Happiness* (1793). 2vols. London: G.G. J. and J. Robinson, 1793.
- . *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Modern Morals and Happiness* (1798). Ed. Isaac Kramnick. London: Penguin, 1985.
- . *The Enquirer; Reflections on Education, Manners, and Literature* (1797) in *Political and Philosophical Writings of William Godwin*. vol.5: *Educational and Literary Writings*. Ed. Pamela Clemit. London: William Pickering, 1993.
- . *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman* (1798). Eds. Pamela Clemit and Gina Luria Walker. Ontario: Broadview, 2001.

- . *St. Leon: A Tale of the Sixteenth Century* (1831). Ed. Devendra P. Varma. New York: Arno P, 1972.
- Leslie Griggs, E.. Ed. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. 6vols. Oxford: Clarendon P, 1956-71.
- Locke, Don. *A Fantasy of Reason: The Life and Thought of William Godwin*. London: Routledge & Kegan Paul, 1980.
- Monro, D. H.. *Godwin's Moral Philosophy; an Interpretation of William Godwin*. London: Oxford UP, 1953.
- O'Shaughnessy, David. *The Plays of William Godwin*. London: Pickering & Chatto, 2010.
- . *William Godwin and the Theatre*. London: Pickering & Chatto, 2010.
- Paul, C. Kegan. *William Godwin: His Friends and Contemporaries*. 2vols. New York: AMS P, 1970.
- Parsons, Florence Mary Wilson. *The Incomparable Siddons*. London: Methuen, 1909.
- Powers, Katherine Richardson. *The Influence of William Godwin on the Novels of Mary Shelley*. New York: Arno P, 1980.
- Rajan, Tilottama, and Julia M. Wright. Eds. *Romanticism, History, and the Possibilities of Genre: Re-forming Literature 1789-1837*. New York: Cambridge UP, 1998.
- Russell, Gillian, "Theatrical Culture" in *The Cambridge Companion to English Literature 1740-1830*. Eds. Thomas Keymer and Jon Mee. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Smith, Elton Edward, and Esther Greenwell Smith. *William Godwin*. New York: Twayne, 1965.
- St Clair, William. *The Godwins and the Shelleys: The Biography of a Family*. London: Faber and Faber, 1989.
- デイディエ、バアトリス。小西嘉幸訳『フランス革命の文学』東京、白水社、1993年。